

大石主税良兼／沢村田之助／ろ

部屋住 無禄

義士示せつふくの連判にのぞみ

父良雄主税をはぶきかれいまだ

若年なれば万一母の愛におぼれ

その期にのぞみ変心あらば未代迄

の知尋んといふ主税これを聞て

たちまちじがいせんとす人々おど

ろきとゝめてつひにれんはんに加ふ

極東のみちは一トすじ君ともに

あみだをそへて四十八人

側用人小性頼兼 知行百五十石

磯貝は東都愛宕山教学院に

おいて召出されて御家来なる

せいちゆう無二の人なり内匠頭殿

そつれいのみぎり泉岳寺にて

おひばらせんと仕るを片岡源五右衛門

とゞむるを聞入れず源五右衛門あだ

うちの大義在すゝめて止めけるせい

ちゆう無二の人なり

ほ／磯貝十郎左衛門正久／尾上和市

神崎与五郎則休／沢村訥升

つ

横目役 知行百五十石ノ役料七両

与五郎が一子与三郎ある時十一メなる

庄屋が子と口ろんして彼がために

きりころさる庄屋は我子をいましめ

神さき方にいたり死をこふ与五郎その

心底をかんじおじやくなる我子にかへて

りきりやうあるものをやしなはんとて

すなはち庄やが子を養子にしけり

人はたゞいはぬ事をは恨らん

うきよの名さへ口なしにして

倉橋伝助武幸ノ市川九蔵

お

近習役 知行三十石ノ五人扶持

武幸は武勇すくれたん

惠之 矢間先崎に雅新や

をとりまきはんきつにて

雨のごとく矢をいこみけり升

ときうちより二人きつていでし

を武幸一人ふんぜんとして

たゝかひけるとなん

間瀬孫九郎正辰ノ市川八百蔵

む

広間番 知行百石

正辰夜うちのをり木良の家

しん鳥井利右衛門に出会ひ

しゆつをつくしてたゝかふところに

正辰雪にすへり泉水におちて

すてにあやふく見へたるおり大い志

主税弓に矢をつかひてひやうと

いるねらひたかわず利右衛門が

むないたかけてうちぬきけり

富森助右卫門正国／中村芝翫

使番 知行百五十石

極月十五日夜うち引取の朝義士に

ゑかふ院まへのさかやに立より橋の

かゝみをぬきてさけをのみける時に

源吾ふでをそめて

山越ぬく刀取／おれて雪の松

正国これお見て

寒鳥の身は／そしらるゝゆくえかな

る

小野寺半右衛門秀当／中村雁八

さ

無禄

秀当は間苗重門の養子なり

他家より来りて赤穂にをる事

いまだ廿八日に至らずして合鉄の

ころをひるかへさずその誠ちゆう

たどつるにもなし

辞世 今朝ははやいふその義もなかりけり

何のためとて露むさぶらん